第二十三講　古文の読解⑥

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（----の左側は口語訳です。）

> 高倉天皇（たかくらてんのう）は十歳のころから紅葉を好み、宮中に「もみじの山」と名付けた小さな山をつくらせ、それを楽しんでいた。ある夜、風が激しく吹いてその山の紅葉をすべて散らしてしまったので、掃除を担当する下役人が紅葉を全部掃き捨て、自分たちの飲む酒をあたためるためにそれらを燃やした。

奉行の〔当番の〕※蔵人（くらんど）、行幸〔天皇のお出まし〕より先にといそぎゆいてみるに〔行ってみると〕跡かたなし。「いかに。」〔どうした〕と問へばしかじかといふ。蔵人大きにおどろき、「あなあさまし。〔ああ、大変だ〕君のさしも執（しっ）しおぼしめされつる〔天皇があれほど執着しておられた〕紅葉を、かやうにしけるあさましさよ。〔あきれたことだ〕知らず、なんぢ等、只今（ただいま）禁獄流罪（るざい）にも及び、〔今すぐ獄に入れられたり流されたりすることになり〕わが身もいかなる逆鱗（げきりん）にかあづからんずらん。〔どんなお叱りをこうむることだろう〕」となげくところに、主上いとどしくよるのおとどを出（い）でさせ給（たま）ひもあへず、〔天皇はふだんより早くご寝所をお出になるとすぐに〕かしこへ行幸なつて紅葉を叡覧（えいらん）なるに、なかりければ、「①いかに。」と御たづねあるに、蔵人奏すべき方はなし。〔天皇に申し上げようがない〕ありのままに奏聞（そうもん）す。〔申し上げた〕天気〔天皇のご機嫌〕ことに御心よげに

うちゑませ給ひて、「②林間煖酒焼紅葉といふ詩の心をば、それらにはたが（だれが）③をしへけるぞや。やさしうも（風流に）仕（つかまつ）りけるものかな。」とて、④かへつて御感（ぎょかん）に預（あづか）つしうへは、あへて勅勘（ちょくかん）なかりけり。（特に天皇のおとがめはなかった）

（「平家物語」より）

（注）※蔵人（くらんど）……天皇のそばに仕える役人。

問1　①いかにとありますが、高倉天皇がこのように尋ねた理由を簡潔に書きなさい。

問2　②林間煖酒焼紅葉とありますが、これは「林間に酒を煖（あたた）めて紅葉を焼（た）く」とよみます。この部分に返り点を補ったものとして適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　林間煖レ酒焼二紅葉一

イ　林間煖二酒一焼二紅葉一

ウ　林間煖レ酒焼レ紅葉

エ　林間一煖二酒焼レ紅葉

問3　③をしへけるとありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。

問4　④かへつて御感に預つしうへはは「かえっておほめにあずかったうえに」という意味ですが、天皇がほめた理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　紅葉を焼いて酒をあたためた下役人たちの行為が、漢詩を思い起こさせるものであったから。

イ　天皇の問いかけに、ありのままの事実を伝えた蔵人の行為が、まじめだと判断したから。

ウ　自分たちの失敗を天皇に伝えた下役人の行為が、職務に忠実だと考えたから。

エ　下役人たちの失態をかばった蔵人の行為が、機転のきいたふるまいに思われたから。

【埼玉県】

Step 2・3

二 次の文章は、『平家物語』「敦盛最期」の一場面である。これを読んで、後の各問いに答えなさい。

〈この場面までのあらすじ〉
各地で挙兵し攻め上る源氏の軍勢に追われて都を捨てた平家は、須磨の一の谷に集結するが、源義経率いる軍勢の奇襲で総崩れとなる。源氏の武将、熊谷次郎直実は、海上の舟に逃れようとする平家の武将（平敦盛）を見つけ、引き返すよう呼びかける。

汀に（(敦盛が)波打ちぎわに）うちあがらんとするところに、おしならべてむずとくんでどうどおち、とつて①おさへて頸をかかんと（討ち取ろうと）甲を②おしあふのけて見ければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧して、かね黒なり（歯を黒く染めている）。我子の小次郎が③よはひ（年齢）程にて、容顔まことに美麗なりければ、④いづくに刀を立つべしともおぼえず。「そもそもいかなる人にてましまし候ふぞ（いらっしゃいますか）。名のらせ給へ。たすけ参らせん」と申せば、「なんぢはたそ」と問ひ給ふ。「物その者で候はねども（たいした者ではございませんが）、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のり申す。「さては、なんぢにあうては名のるまじいぞ（そういうことなら、お前に対しては 名のる必要もない）。なんぢがためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸をとつて人に問へ。見知らうずるぞ（(自分を)見知っていることだろうよ）」とぞ宣ひける。熊谷、「⑤あつぱれ、大将軍や。此人一人うち奉つたりとも（討ち申し上げたとしても）、まくべきいくさに勝つべきやうもなし。又うち奉らずとも、勝つべきいくさにまくる事もあらじ（まさかあるまい）。小次郎がうす手負うたるをだに（軽傷を負っているのさえ）、直実は心苦しうこそ思ふに（つらく思っているのに）、此殿の父、うたれぬと（討ち取られたと）聞いて、いか計かなげき給はんずらん（嘆かれることだろう）。⑥あはれたすけ奉らばや（ああ、お助け申し上げたい）」と思ひて、うしろをきつと見ければ、土肥、梶原（(源氏の武将の)土肥実平、梶原景時）五十騎ばかりでつづいたり。

（『新編　日本古典文学全集』より）

Step 2
(1) 「平家物語」の作品の種類として最も適切なものを次のア〜エから一つ選び、記号を書きなさい。

ア　和歌　イ　古典落語　ウ　日記　エ　軍記物語

Step 2
(2) ——線部①「おさへて」、③「よはひ」、④「いづく」を、現代仮名遣いに直して、ひらがなで書きなさい。

①　③　④

Step 2
(3) 本文中に擬態語が三つ使われている。そのうち二つを本文中から抜き出して書きなさい。

Step 3
(4) ——線部②「おしあふのけて」の主語にあたるものを、次のア〜エから一つ選び、記号を書きなさい。

ア　敦盛　イ　直実　ウ　此殿の父　エ　小次郎

Step 3

(5) 直実が初めて間近に見た敦盛の様子が書かれている部分を本文中から二十字以上二十五字以内でさがし、最初の三字を書きなさい。

Step 3

(6) 本文中には直実と敦盛の言った言葉として「　」でくくるべきところがそれぞれ一カ所ずつある。その言葉を本文中からさがし、最初と最後の三字を書きなさい。

直実　〜

敦盛　〜

Step 3

(7) 直実が――線部⑤「あつぱれ、大将軍や」と思った理由として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号を書きなさい。

ア　今にも討ち取られそうなのに、平家の武将が正々堂々とした態度で受け答えをしたから。
イ　この平家の武将が敦盛だということが分かり、大きな手柄をあげられると喜んだから。
ウ　平家の武将が名乗らなかったので、自分が大将軍であると言って失礼をとがめようと思ったから。
エ　今にも討ち取られそうなのに、そのことが分かっていない平家の武将の未熟さを感じたから。

Step 3

(8) ――線部⑥「あはれたすけ奉らばや」のときの直実の考えとして適切なものを次のア〜エから二つ選び、記号を書きなさい。

ア　土肥実平と梶原景時の軍勢が迫り、このままではこの方が討ち取られてしまう。
イ　小次郎と同じほど若いうえに、化粧までしているこの方を討ち取るのは自分にとって恥だ。
ウ　自分は小次郎が軽傷を負っただけでもつらいのに、この方の父親がひどく嘆かれることだろう。
エ　今ここでこの方を討ち取っても討ち取らなくても、戦いの勝敗に大きな影響はない。

【長野県】

〈Note〉

第二十三講　古文の読解⑥

Step 1

一

解答

問1、紅葉がなかったから。（同意可）　問2、ア　問3、おしえける　問4、ア

解説

問1、「已然形＋ば」は理由を表すので、「紅葉を叡覧なるに、なかりければ」が理由にあたる。
問2、一字戻って読む場合には「レ点」を、二字以上戻って読む場合には「一・二点」を用いる。
問3、助詞以外の「を」は「お」にする。また、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
問4、下役人が酒をあたためるために散った紅葉を焼いたことについて、「林間煖酒焼紅葉」という漢詩を引用してほめている。

口語訳

当番の蔵人が、天皇のお出ましより先に行こうと急いで行ってみると（紅葉は）跡形もない。「どうした。」と聞いたところこうこう（しました）と言う。蔵人はたいへん驚き、「ああ、大変だ。天皇があれほど執着しておられた紅葉を、このようにするとはあきれたことだ。わかっていないだろうが、おまえたちは、今すぐ獄に入れられたり流されたりすることになり、私自身もどんなお叱りをこうむることだろう。」と嘆いているところに、天皇はふだんより早くご寝所をお出になるとすぐに、そちらへお出ましになって紅葉をご覧になると、（紅葉が）なかったので、「どうした。」とお尋ねになったところ、蔵人は天皇に申し上げようがない。ありのままに申し上げた。天皇のご機嫌は特別こころよげで微笑まれ、「林間に酒を温めるため紅葉を焼くという漢詩の心を、そなたたちにはだれが教えたのだ。風流におこなったことだ。」とおっしゃられて、かえっておほめにあずかったうえに、特に天皇のおとがめはなかった。

Step 2・3

二

解答

(1) エ　(2) ① おさえて　③ よわい　④ いずく　(3) むず〔と〕・どう〔ど〕・きつ〔と〕（いずれか2つ）　(4) イ　(5) 年十六

(6) （直実）物その～郎直実　（敦盛）さては～ずるぞ　(7) ア　(8) ウ・エ

解説

(2) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。また、「づ」は「ず」にする。

(3) 擬態語とは、状態や行動を音で表現した言葉。直実が敦盛と組んで馬から落ちる場面と、直実が後ろを見やる場面で使われている。

(4) 敦盛をとっておさえた人物。

(5) 直実が「とっておさへて…おしあふのけて」見た敦盛の印象をおさえる。

(6) 「…と名のり申す」「…とぞ宣ひける」と引用を表す「と」や、発言を表す言葉に着目する。

(7) 「あっぱれ」は、相手の言動がみごとだと感心を表す。敦盛が「なんぢにあうては名のるまじいぞ…見知らうずるぞ」と言ったことに着目する。

(8) 「此人一人…よもあらじ」「小次郎がうす手…なげき給はんずらん」とあることから考える。

口語訳

（敦盛が）波打ちぎわにあがろうとするところに、（馬を）並べてむずと組んでどしんと落ち、（敦盛を）とっておさえて首を討ち取ろうと甲を押し上げてみると、年のころは十六、七くらいだが、薄化粧をして、歯を黒く染めている。自分の子の小次郎の年齢くらいで、容貌は非常に美しかったので、どこに刀を立てていいかもわからない。「そもそもあなたはどういう人でいらっしゃいますか。お名のりください。お助けしましょう」と申し上げたところ、「お前はだれだ」とおたずねになる。「たいした者ではございませんが、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のり申す。（敦盛は）「そういうことなら、お前に対しては、名のる必要もない。お前のためにはよい敵であるぞ。名のらずとも首をとって人に問え。（自分を）見知っていることだろうよ」とおっしゃった。熊谷は、「あっぱれ、立派な将

軍だ。この人、一人を討ち申し上げたとしても、負けるにちがいない戦に勝つはずもない。また、討ち申さなくても、勝つにちがいない戦に負けることもまさかあるまい。小次郎が軽傷を負っているのさえ、直実はつらく思っているのに、この殿の父は、討ち取られたと聞いて、どれほど嘆かれることだろう。ああ、お助け申し上げたい」と思って、後ろをきっと見たところ、（源氏の武将の）土肥、梶原が五十騎ほど続いていた。